



TITLE:

## 心理研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

室伏, 靖子; 浅野, 俊夫; 小嶋, 祥三; 松沢, 哲郎

---

CITATION:

室伏, 靖子 ...[et al]. 心理研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報  
1985, 15: 15-17

ISSUE DATE:

1985-10-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163584>

RIGHT:

- 6) 松波謙一(1984): 随意運動遂行中の前頭領域における2-DGの取り込み。失状断切片に基づく観察, 第8回神経科学学術集会予稿集 95.
- 7) 久保田競(1984): 手と脳の間にできる神経回路と随意運動の発現, 第5回バイオメカニズム学術講演会予稿集 1-2.
- 8) Matsunami, K. (1984): Radioactive 2-deoxy-glucose uptake in skeletal muscles in trained monkeys. *Neurosci. Lett. Suppl.* 17: 51.
- 9) Matsumura, M., Sawaguchi, T. and Kubota, K. (1984): Synaptic connections correlated with modulatory spike activity during voluntary movement in the primate motor cortex. *Neurosci. Lett. Suppl.* 17: 62.
- 10) Arikuni, T. and Kubota, K. (1984): The prefronto-caudate projection in the macaque monkey, studied by the HRP method. *Neurosci. Lett. Suppl.* 17: 80.
- 11) Kubota, K. (1984): Prefrontal neuron activities in a visual discrimination task with GO-NO GO performances in under-trained monkeys. *Neurosci. Abs.* 10: 129.
- 12) Arikuni, T. and Kubota, K. (1984): Cells in internal granular layer of Macaque prefrontal cortex project to the caudate nucleus. *Neurosci. Abs.* 10: 739.
- 13) Düsteler, M.R., Wurtz, R.H., Newsome, W.T. and Mikami, A. (1984): Deficits in pursuit eye movement following ibotenic acid lesions of the foveal representation of area MT of macaque monkey. *Neurosci. Abs.* 10: 475.
- 14) 松村道一, 沢口俊夫, 久保田競(1985): サル前頭野ニューロンの薬物感受性と層分布について, 第62回日本生理学会大会予稿集 P 106.
- 15) Matsunami, K., Funahashi, S. and Kubota, K. (1985): Deoxyglucose uptake into the brain of the monkey in relation to the behavior induced by intra-

cranial self-stimulation. Abstracts International Symposium. Neuronal and Endogenous Chemical Control Mechanisms on Emotional Behavior. p. 21.

## 心理研究部門

室伏靖子・浅野俊夫・小嶋祥三・松沢哲郎

### 研究概要

- 1) チンパンジーの図形語による記述行動の分析 — 語順による統制

室伏靖子・浅野俊夫・小嶋祥三・松沢哲郎

チンパンジー(アイ)は、テレビ画面にあらわれる2名の人物(A, B)のうち、いずれが動作の主体となり客体となるかによって、「A」「近づく」「B」の3語記述における個体名(A, B)の位置を変えることを学習した。この語順による統制の般化は、緩慢に進行し、多種類の画像による訓練のくり返しを必要とした。

- 2) チンパンジーにおける数の概念の形成<sup>1)</sup>

室伏靖子・浅野俊夫・松沢哲郎・板倉昭二<sup>2)</sup>

チンパンジー2頭に、点(直径1.5cm)のランダム・ボタンを見せて、その数を同定させる訓練を、それぞれ異なった反応を用いて行った。数学のラベルによる反応では6個まで、系列的なキー押し反応では4個までを完了した。これらの学習によって、チンパンジーが数のシステムをどの程度理解しているかを分析する。

- 3) ニホンザルの集団場面におけるオペラント行動の獲得と伝播<sup>3)</sup>

浅野俊夫

本研究所の放飼場の若桜群を対象にして、パネルを押すと大豆等の食物が入手できるという新しい行動を集団場面での条件づけによって形成し、伝播する様子を観察した。今後はパネル押しよりも一層むずかしいゴルフボールを拾って交換台に入れ、大豆を入手するという集団場面におけるトークン使用の伝播を分析する。

- 
- 1) 本吉良治・山田恒夫(京大文学部, 昭和59年度共同利用研究員)との共同研究。
  - 2) 大学院生。
  - 3) 樋口義治(愛知大, 学振流動研究員)との共同研究。

#### 4) オペラント強化の性質に関する実験的研究

浅野俊夫

主としてニホンザルの摂食行動をとりあげ、摂食スケジュールがオペラント行動の強化子の強化力にどのように関与するのかを、近年のエコロジ-的視点と環境適応における行動の配分(行動経済)という観点から分析する。

#### 5) チンパンジーにおける刺激等価性の獲得に関する実験的分析

浅野俊夫

ヒトの言語習得過程において、もともと異なった刺激が機能的に等価な性質を獲得する過程が重要であることが明らかにされて来ているので、その過程をチンパンジーで吟味する。

#### 6) チンパンジーの聴覚と音声の発達

小嶋祥三・浅野俊夫・松沢哲郎・室伏靖子

前年度にひきつづき、人工飼育のチンパンジー乳幼児の音声を記録し、ソナグラフ、FFT分析器による分析を行い、その発達について検討した。また、発声の条件づけを行い、[ア]と[オ]の2声をナキワケることができた。

#### 7) 霊長類の聴覚と音声の研究

小嶋祥三

前年度にひきつづき、チンパンジーの音の大きさの知覚、音声弁別に関する研究、ニホンザルにおける合成音別の弁別・記憶に関する研究を行った。

#### 8) チンパンジーによる図形パターンの「構成」 松沢哲郎・藤田和生<sup>4)</sup>

チンパンジー(アイ)に、2~3個の要素図形が複合した幾何学図形を見せ、同じ図形を要素図形から構成する課題をおこなった。図形パターンの認知における情報処理過程をヒトと比較検討している。

#### 9) 霊長類乳幼児の行動発達<sup>5)</sup>

松沢哲郎

ヒト、チンパンジー、オランウータン、ニホンザルを主たる対象として、出生直後からの姿勢制御と認知機能の発達の種間比較をしている。

#### 10) ヒトの高所順応の心理物理学的研究

松沢哲郎

ネパールヒマラヤのカンチェンジュンが峰登攀時に、ヒトが8000mを越える高所の低酸素・低温にさらされたときの精神機能の低下を、ハンドヘルドコンピューターを用いた作業検査等によって測定した。

#### 11) 感覚性強化を用いた霊長類の種の認知の分析 藤田和生<sup>4)</sup>

霊長類が、自身の種や他の近縁種をどのように区別しているかを、それらの写真の感覚性強化子としての機能に基いて分析している。

#### 12) 新しい行動の普及過程に関する研究<sup>3)</sup>

藤田和生<sup>4)</sup>・樋口義治

欧文ワードプロセッサを使用する行動が集団内に広まる過程を調査し分析した。

### 総 説

- 1) 浅野俊夫(1984):チンパンジーの言語能力。河合雅雄編「霊長類学への招待」,東京:小学館 165-190.
- 2) 宇阪良二・浅野俊夫・藤健一(1984):心理学のインストラメンテーションにおけるマイクロコンピュータ:その来し方行く末。PLA NET, 4, 18-24.
- 3) 小嶋祥三(1985):前頭前野と短期記憶。精神医学, 27, 625-631.
- 4) 松沢哲郎(1984):二重分節言語への展望——チンパンジーの「言語」習得——。ユリイカ, 16(12), 99-109.
- 5) 松沢哲郎(1984):チンパンジーの赤ちゃんが生まれた:霊長類の比較発達心理学③, 発達, 20, 93-102.
- 6) 松沢哲郎(1985):ニホンザルの視知覚の発達:霊長類の比較発達心理学④, 発達, 21, 63-73.
- 7) 松沢哲郎(1985):鏡のなかの「わたし」——霊長類における鏡映像の認知——:霊長類の比較発達心理学⑤, 発達, 22, 16-85.
- 8) 松沢哲郎(1985):思考と言語。林部敬吉編「人間論」,酒井書店, 115-141.

### 論 文

- 1) Kojima, S. (1985): Auditory short-term memory in the Japanese monkey. Intern. J. Neuroscience, 25, 255-262.
- 2) Matsuzawa, T. (1985): Use of numbers

4) 学振奨励研究員。

5) 田中昌人・竹下秀子(京大教育学部, 59年度共同利用研究員)との共同研究。

- by a chimpanzee. *Nature*, 315: 57-59.
- 3) Matsuzawa, T. (1985): Colour naming and classification in a chimpanzee (*Pan troglodytes*). *J. Hum. Evol.*, 14: 238-291.
  - 4) 松沢哲郎・木田光郎・古賀一男 (1985): ヒマラヤ 8000 m における精神機能 — ハンドヘルドコンピューターを用いた精神作業検査。名古屋大学環境医学研究所年報, 36, 238-248.
  - 5) Fujita, K. (1985): Effects of ratio reinforcement schedules on discrimination performance by Japanese monkeys. *J. Exp. Anal. Behav.*, 43 (2): 225-234.
  - 6) 藤田和生・樋口義治 (1985): A 研究所における欧文ワードプロセッサ使用行動の普及過程。心理学研究, 56 (1): 48-51.
  - 7) 松沢哲郎 (1984): チンパンジーの色の測定。第 8 回神経科学学術集会, 予稿集, 53.
  - 8) 熊崎清則・松沢哲郎・松林清明: ビデオセンサーを用いたチンパンジー分娩予知システム。第 28 回プリマーテス研究会 (1984), 抄録 2。
  - 9) 藤田和生・松沢哲郎: チンパンジーの認知世界 — 感覚性強化による検討 —。日本心理学会第 48 回大会 (1984), 予稿集, 318。
  - 10) 竹下秀子・田中昌人・松沢哲郎: オランウータン乳児の姿勢および知覚運動機能の発達 — チンパンジー, ヒト乳児との比較 —。第 29 回プリマーテス研究会 (1985), 抄録, 19.
  - 11) 藤田和生: ニホンザルの Observing Behavior (2) — 窓あけ方式を用いて —。日本動物心理学会第 44 回大会 (1984), 動心年報, 34, 44.

#### 報告・その他

- 1) 杉山幸丸・松沢哲郎 (1984): チンパンジーは語る。望星, 15 (4), 36-51.
- 2) 松沢哲郎 (訳) (1985): 社会生物学。(E. O. ウイルソン著, 伊藤嘉昭監修), 思索社, 第 5 巻。

#### 学会発表

- 1) 室伏靖子・本吉良治・山田恒夫・板倉昭二: チンパンジーにおける数のマッチング。日本動物心理学会第 44 回大会 (1984), 動心年報, 34, 42.
- 2) 浅野俊夫・吉久保真一: チンパンジーをもちいた異種見本合せ手続きによる刺激等価の形成の試み。日本動物心理学会第 44 回大会 (1984), 動心年報, 34, 44.
- 3) 浅野俊夫・吉久保真一: チンパンジーにおけるアルファベット文字の認知。日本心理学会第 48 回大会 (1984), 予稿集, 319.
- 4) 小嶋祥三: 人工飼育チンパンジーの出生直後からの発声について。日本動物心理学会第 44 回大会 (1984), 動心年報, 34, 31.
- 5) 小嶋祥三: 前頭前野と短期記憶。日本神経心理学会総会 (1984), 予稿集, 23.
- 6) 小嶋祥三: 人工飼育チンパンジー乳幼児の音声の発達と可塑性。日本心理学会第 48 回大会 (1984), 予稿集, 277.
- 7) 小嶋祥三 (1984): チンパンジーの音の大き

#### 社会研究部門

川村俊蔵・鈴木 晃・小山直樹・森 梅代<sup>1)</sup>

#### 研究概要

- 1) スマトラにおける 2 種の霊長類の研究  
川村俊蔵・大井 徹<sup>2)</sup>  
スマトラ自然研究計画・第 5 年次計画の一環として, 川村は 2 度インドネシアに赴き, 一回目にはインドネシア側研究者の指導を行うかたわら, クロカンムリヤセザルの社会・生態・分布の研究を続行し, 二回目には大井とともに, これまで世界的に研究の遅れているブタオザルの長期研究を開始した。
- 2) インドネシア・カリマンタンにおけるオランウータンの社会行動と社会構造に関する研究

鈴木 晃

カリマンタン・クタイ保護区に生息するオランウータンの観察を行った。30 頭のオランウータンの森林内での付置構造を記録し, 社会構造に関する討論を行った。

- 3) カニクイザルの比較社会学的研究

小山直樹

1984 年 8 月 27 日から 1985 年 1 月 5 日まで, スマトラのグヌンメル山においてカニクイザルの

- 
- 1) 教務職員, 2) 大学院生, 3) 研修員